

万国博と現代音楽

渚野 昌 (理学教室)¹

現代音楽に聴く²

小櫻 秀樹 (作曲)

「現代音楽」というのはピンとこないし難しい、というようなコメントを今まで幾度となくもらった。このように批評を頂けるのはまだマンで、大方の人にとっては、「現代音楽」とは全くもって未知なる分野で、私があるような音楽を専門としている作曲家だと自己紹介してみても、一体何をやっているのかおおよそ見当もつかない、というのが正直なところだろう。

よく言えば「モダニズム、前衛的、実験的」悪く言えば「メロディーがない、わけがわからない、自己満足、雑音」このようなイメージが持たれがちな現代音楽は、“普通の”クラシックに慣れ親しんだ人にとっては必ずしも受け入れやすいものとは言えないだろうし、時によっては聞く意欲すら挫いてしまうのではないかと内心危惧してしまう事さえある。

このように世間に全く認知されていない「現代音楽」であるが、この名称は、クラシック、ジャズ、フォークなどのように独立した音楽のカテゴリーの1つを指すものと考えられていて、必ずしも「現代」の「音楽」であるということも主張しているわけではない。ここでは20世紀以降の芸術音楽という限定した意味で考えることにする。

レクチャー・コンサート形式で行うことになる本講義では、フルート奏者の丹下さと子氏を迎え、私の作品を含む20世紀以降の3作品を演奏する—ドビュッシー(1862-1918)、ヴァレーズ(1883-1965)、小櫻秀樹の作品を予定。

クラシック音楽では常識である調性(協和音)的音響や規則的なリズムを覆す現代音楽とはどのような「響き」を持っているのか? また現代音楽は普通に耳にする音楽の言語から大きく逸脱しているのか、またそうだとすればそれは何故なのか? さらには、ポピュラー音楽を含め他の音楽が現代音楽にどのような影響を与えてきたのか? 逆に現代音楽は他の音楽のジャンルにどのような影響を与えたか? このような疑問に対し、幾つかのサンプルを聞いてもらいながら、私なりの解釈を試みたい。

小櫻秀樹 愛知県出身。東京芸術大学卒業後、同大学大学院修士課程修了。1999年9月より1年間文化庁在外研修員としてニューヨークに滞在し、コロムビア大学にてトリスタン・ミュライユ氏に師事。その後、ストックホルム王立音楽大学大学院にてベント・ソレンセン、バル・リントグレンの両氏に師事。スウェーデンを拠点に活動を行い、同音楽大学大学院を2004年修了。2004年8月よりベルリン在住。STIM(スウェーデン作曲家協会)会員。これまでに野村賞(1994年)日本交響楽財団作曲賞(1995年)、第1回武満徹徹作曲賞第2位(1位なし)(1997年)、文化庁舞台芸術奨励賞(2000年)など受賞。作品は、日本、ヨーロッパ、北米で演奏、放送、録音、出版されている。近年は文化交流の一環として演奏家や作曲家を海外より日本へ招待しコラボレーションを積極的に行っている。今後の予定には、ベルリン、ハノーファー、ウィーン、ストックホルム、東京での作品演奏がある。また11月末よりコンポーザー・イン・レジデンスとしてヴィスビー(スウェーデン)に滞在し、ライヴ・エレクトロニクスの作品製作に取り組む予定である。

丹下さと子(フルート) 愛知県立芸術大学卒業。同大学院修了。中部読売新人演奏会出演。第7回ながの—アスペン音楽祭音楽賞受賞。アメリカ・コロラド州アスペン音楽祭に奨学生として参加。2001年小坂井町フロイデンホールにてリサイタルを開催。これまでにフルートを田村四郎、酒井みさを、ネディン・エイシンの諸氏に、室内楽を菅原暉、中川良平、村田四郎の諸氏に師事。愛知シンフォニエッタ、アンサンブル・カラヴィンカ、各メンバー。

今年の総合科目は、万国博覧会が大きなテーマとなっています。19世紀中葉に最初の万国博覧会が西洋で開催されて以来、万国博覧会は物産の国際見本市であるだけでなく、各国の自国プレゼンテーションや、様々な文化交流の場としての役割もはたしてきました。文化交流の中には当然音楽も入っているわけですが、本講義のテーマになっている現代音楽に関しても、いくつかの意味で重要な役割をはたしてきたことを指摘することができます。ここでは、特に、1889年のパリ万国博と1970年の大阪万国博に注目してみたいと思います。

¹これは2005年当時の肩書きです。

²この文章は、中部大学での2005年度総合科目の教科書に掲載された文章に手を加えたもので、この科目の枠内で2005年6月22日に中部大学三浦幸平メモリアルホールで実施された、中部大学学部1年生のためのレクチャー・コンサートのプログラムノートです。

1889年のパリ万博はヨーロッパ音楽の1つの変革点となった出来事であると評価されることがあります。この万国博覧会ではエッフェル塔が建設されていますが、エジソンの蓄音機や音楽の有線通信による配信など、後に音楽文化に決定的な影響を与えることになる技術革新のデモンストレーションの他、ヨーロッパ以外の文化圏の音楽の（ライヴ）演奏が沢山あり、フランスの音楽家たちは、初めて非ヨーロッパの芸術音楽に触れて非常なショックを受けたのでした。その中には、当時まだ27歳で、作曲家としての活躍の入口にいたクロード・ドビュッシー(1862～1918)がいました。特に、ドビュッシーはここで実演されたバリ島のガムラン音楽に啓発を受けています。ドビュッシーは1900年のパリ万博でもガムラン音楽やベトナムの音楽などを熱心に聞いていて、後年の音楽評論などで、それらの体験を何度も語っています。後年のドビュッシーは、本講義での意味の「現代音楽」の始まりの1つとなる音楽語法を確立していますが、その作品には東洋の音楽の多層的な影響が指摘できます。永井荷風や、島崎藤村など、20世紀の初頭にパリに滞在した日本の文化人の中には、ドビュッシー自身の演奏する音楽会を訪れている人たちがいました。彼等のヨーロッパ滞在記やエッセーなどを見ると、これらの人々は、ドビュッシーの音楽の中に、ただちに東洋的な資質を見出していることが分ります。

ドビュッシーの音楽やその美学は後の現代音楽作曲家たちに大きな影響を与えたので、彼がパリの万国博覧会で東洋音楽を聞いていなかったとしたら、例えば、バルトーク(1881～1945)の東欧音楽との取組みや、メシアン(1908～1992)のインドのリズムや鳥の歌の利用、ライヒ(1936～)やリゲティ(1928～)のアフリカ音楽からの触発など、ドビュッシーの後の時代の作曲家の試みた、従来の西洋音楽の語法の外側にある音楽美学や音楽素材への取組みは随分と違ったものになっていただろうと想像されます。武満徹(1930～1996)はドビュッシーから最も影響を受けた現代音楽作曲家の一人と目されていますが、ドビュッシーの東洋音楽との対峙から生れた音楽の影響の残映は本講義の講師である小櫻秀樹氏の作品にも認められるように思います。

非ヨーロッパ音楽のヨーロッパ音楽との遭遇というテーマでは、レコード店などで“ワールド・ミュージック”として分類されているような種類の音楽を思い浮かべる人も多いかもしれません。しかし、このキーワードで分類される音楽の多くは、安易なエキゾチズムから味つけされた商業音楽にすぎないことが多いように思えます。趣味の問題と言われるかもしれませんが、上であげたような現代音楽の作曲家が真摯な探究の結論として得た作品に現われる“非西洋”にも真剣に耳を傾けてみるべきだろうと思います。

現代音楽との関りでとりあげてみたいもう1つの万国博覧会は、1970年の大阪万博です。この万国博覧会では、「現代音楽」が公式イベントとして大きくとりあげられています。博覧会のパビリオンのうち西ドイツ館ではシュトックハウゼン(1928-)のライブ演奏があり、鋼鉄館では武満徹の企画により大規模な現代音楽の

演奏会が行われ、会場の音響にも湯浅譲二(1929-)をはじめ日本の現代音楽を代表する作曲家たちの電子音響作品が用いられていました。

大阪万博の頃は「現代音楽は難しいが、これこそが未来の音楽である」というような政治レベルの理解があったのではないかと思います。

当時、ある日本人作曲家が、誰のために作曲するのか、という質問に「未来の知性のため」と答えたことが、話題になったことがありました。しかし、「未来の知性のため」に政治レベルからの御墨付で作曲する、というのはかなり全体主義的な危なさを感じます。実際、この作曲家自身も後年そのことに気づき、やがて音楽における反グローバリズムとでも言えるような立場をとるようになります。1990年代初頭の東西の政治的壁の崩壊以来、現代音楽を含む現代芸術や「役に立たない」科学に対する政治レベルの立場は大きく変ってしまったように思えます。こう言うと大雑把すぎるかもしれませんが、この変化は、「冷戦時代には、西側の“精神の自由を保障する”という立場の表明の1つとしての現代芸術、現代科学の擁護の姿勢があり、一方の東側には、西側に負けていないことを証明するための、現代芸術、現代科学を(ある制限の中では)奨励する姿勢があったのに、ともに東西の壁の崩壊後には、そのような現代芸術、現代科学の奨励の姿勢に政治的意味がなくなってしまった」ということの結果として捉えることができるのではないのでしょうか。万国博覧会における現代音楽に関しても、このような展開に由来する温度差は歴然としていて、例えば、2000年のハノーヴァー万博では現代音楽のイベントは公式プログラムにはほとんど盛り込まれておらず、今回の愛知万博では、本講義での意味の現代音楽に関連した公式イベントは、少なくとも公式プログラムを見る限り、皆無です。

このこと自体は、ある意味で健全な展開と言うこともできるのかもしれませんが、全体主義的な主張は最近とみに頻繁に聞かれるようになってきている反面、「未来の知性」あるいは「未来の感性」についてはほとんど語られることがなくなってきている、という日本での、また国際的な、昨今の傾向には不安の念を禁じ得ません。

本講義は6月22日の午前と午後の2回のみ予定されており、学科によってはこのレクチャー・コンサートを聞けません。また、講義を聴講した人の中にも講義の回だけでなくもう一度聞いてみたいと思う人もあるかもしれませんし、他の学年の学生や先生方の中にも興味のある方がおられるかもしれません。そこで、講義の日程の前後に、もう一回、同様の“追加公演”を企画することを試みたのですが、今回は準備不足のためはたせませんでした。近い将来(必ずしも中部地方ではないかもしれませんが)何らかの形で、一般の聴衆向けの同様のレクチャー・コンサートのシリーズを実現したいと思っています。

なお、レクチャー・コンサートに関連することについては、レクチャー・コンサートのホームページ：

<http://math.cs.kitami-it.ac.jp/~fuchino/chubu/musique.html>

に情報を順次掲載する予定です。ぜひ御覧ください。